中秋の名月に「采女祭」

猿沢池の淵埋めるほどの観客

采女祭保存会は17日、奈良市樽井町の猿沢池周辺で、奈良時代に身を投じたと伝わる女官「采女（うねめ）」の霊を慰め、人々の幸せを祈る「采女祭」を開催した。当日は、天平衣装に身を包んだ約２００人の「花扇奉納行列」や、篠笛奏者の佐藤和哉さんの奉納演奏「采女おとがたり」を実施。祭りのメインになる「管絃船の儀」では、開催の数時間前から猿沢池の淵を埋め尽くすほどの観客が集まり、外国人観光客の姿も多く見られた。

祭りは平安時代の10世紀中ごろに成立した歌物語「大和物語」に記された、帝の寵愛が衰えたことを嘆いた采女が、猿沢の池に身を投げたという物語が起源になっている。

また、猿沢池の畔にある春日大社の末社「采女神社」は、その霊を慰めるため建てられたもの。鳥居と反対側を向いている社は、「わが身を投じた猿沢池を見るに偲（しの）びないと、采女が社を後ろ向きにした」という伝説が残っている。

当日、采女祭は午後5時からスタート。秋の花草で飾った約2㌔の花扇を運ぶ「花扇奉納行列」がＪＲ奈良駅前から出発した。御所車に乗った十二単姿の花扇使や、天平衣装をまとった行列には、采女伝説が由縁で姉妹都市の締結をしている福島県郡山市の品川萬里市長らも参加。三条通り商店街や小西さくら通り商店街、東向商店街などを通り、采女神社を目指した。

花扇を載せた管絃船が猿沢池をゆっくり巡った

2隻目の管絃船には福島県郡山市の使節団らが搭乗

「采女おとがたり」で篠笛演奏を披露する佐藤さん

花扇奉納行列や奉納演奏も実施

同6時ごろからは、采女神社で春日大社神職による「花扇奉納神事」を行われた。その後、猿沢池に浮かぶ管絃船の上で、佐藤和哉さんが「采女おとがたり」として「花筏（いかだ）」と「さくら色のワルツ」の2曲を演奏。采女を偲ぶ笛の音色に、観客らは静かに耳を傾けた。

演奏後に采女祭保存会の伊藤隆司会長は「采女おとがたりでは、猿沢池に伝わる采女の思いを音楽で表現し、この中秋の名月の夜に奏でていただきました。次の『管絃船の儀』は祭りのクライマックスです。采女の御霊を鎮めるため花扇を猿沢池に投じますが、多くの説明よりも厳粛かつ盛大な祭りをご覧いただければ」とあいさつ。

祭りを締めくくる「管絃船の儀」では、南都楽所（なんとがくそ）による雅楽が響き渡る中、花扇を載せた管絃船が猿沢池を進んだ。猿沢池の淵を囲む観客らは池に浮かぶ流し灯籠の間をゆっくり巡る管絃船の写真や動画撮影のため、カメラやスマートフォンを向けた。管絃船は最後に花扇を池に投じ、采女の霊が鎮まることを祈った。

猿沢池周辺の商店街を巡り、約2㌔の花扇を運ぶ「花扇奉納行列」

猿沢池の淵を埋め尽くすほどの観客が集まり、「管絃船の議」の開始を待った